

2023 インテグリティ教育

豊田 則成

びわこ成蹊スポーツ大学

JBAインテグリティ委員会W.G.

子ども**の**未来に
責任を持つ！

暴言暴力の根絶を目指して

- 議論を風化させてはならない
- まず10年間は議論し続けよう
- 暴言暴力の根絶は必須課題
- 社会的な責任を帯びている

子どもは困っている

保護者も困っている

コーチも困っている

コーチも苦しんでいる

- 何をどのように苦しんでいるのか、
見える化する必要がある
- その苦しみは他の人々を苦しめていることもあるかも
- 時には人を傷つけてしまうことも

悩みを共有し
互いに支え合う

「技術指導」よりも「心の支援」を

□ 子どもはコーチを信頼している

□ 子どもを保護し癒していく

□ 子どもを深く理解する(心の伴走)

□ 学び続け、議論し続ける

子どもは大人の
ミニ化でない！

子どもたちは**発展途上**にある

- 奥行き知覚・動体視力(未完成)
- 周辺視・図と地の分化(未完成)
- 聴覚記憶(コーチからの指示を把握する)
- 聴覚弁別(指示や声援と雑音の聴き分け)
- 相手を打ち負かすことよりも、自分のベストを尽くすことを重視する(不安と自信)

暴力はイケナイ
暴言は？？？

コーチングは社会的な営み

試合会場ではなくなってきた
では、**普段の練習**はどうか？

指導 ≠ 支配

日常的に実践されている指導を振り返り、点検する必要がある

罰 ・ 脅し ・ 制裁

何も教えていない

暴言暴力 = 虐待

子どもたちの発達に不利益なかわりにはごく身近なところにある

児童虐待防止法(略称)

- 正式 児童虐待の防止等に関する法律
- 虐待(Abuse: アブ्यूズ) 大人から子どもへの発達を阻害する行為全般
- ①身体的虐待(暴力・体罰)、②性的虐待、③心理的虐待、④ネグレクト
- 保護者が対象(だからこそ厄介！)

マルチリポートメント

「違法ではないけども、不適切なかわり」

マル

(mal 悪い)

+

トリートメント

(treatment 扱い)

チャイルド・マルトリートメント

18歳未満の子どもに起こるあらゆる種類の身体的・心理的・性的虐待とネグレクト、商業的またはその他の搾取を行うこと、さらに責任、信頼または権力の関係の文脈において、子ども
の心身の健康・発達・大人・対人関係などに
害をもたらすこと。（世界保健機関 WHO）

指導者の不適切なコトバ

心理的虐待になっていないか

「指導者の焦りによって適切でないかわりとなっていないか」

指導者の不適切なコトバ（１）

□ 質問形式で問い詰める

「何回言われたら分かるの？」

「どうしてそういうことするの？」

「一体、何やってるの？」

「誰に向かって、そんな口のきき方をするんだ？」

指導者の不適切なコトバ（２）

□ **本当の意図を語らず、裏を読ませようとする**

「やる気がないなら、やらなくていい」

「もう勝手にすれば」

「好きにすればいいじゃん」

→「やりなさい」「勝手は許さない」

指導者の不適切なコトバ（3）

□ 脅して動かそうとする

「早くしないと〇〇させないよ」

「じゃあ〇〇できなくなるけどいいね」

「もうみんなと〇〇させられないな」

指導者の不適切なコトバ（４）

□ 虎の威を借る

「お母さんに言うよ」

「お父さんに聞いてこいよ」

「〇〇コーチに怒ってもらうからね」

指導者の不適切なコトバ（5）

□ 下級生と比較する

「そんなこと1年生もやりません」

「1年生からやり直しな」

「幼稚園に戻った方がいいね」

指導者の不適切なコトバ（6）

□ **指導者側に責任がないことを強調する**

「それ、ダメだって言ったよね」

「もうやらないはずだったよね」

「さっき約束したばかりだよ」

指導者の不適切なコトバ（7）

□ 見捨てる

「じゃあ、もういい」

「さようなら」

「バイバイ」

**指導者は 子どもの
「心の代弁者」になっているか**

指導者の不適切なオコナイ

ネグレクトになっていないか

「主体性・自立の促しをカサに指導を放棄していないか」

指導者の不適切なオコナイ(1)

□ 高圧的な指導、大声で怒鳴る

大人の過度な期待に、子どもを無理矢理に応えさせようとしていないか。

指導成果が実現しない焦りから、高圧的な指導を強いて、子どもが指導者の顔色ばかりをうかがっていないか。威圧によって子どもコントロールしようとしていないか。

指導者の不適切なオコナイ(2)

□ **目を合わせない、笑いかけない**

練習に来て一度も指導者と言葉を交わさずに帰ってしまう子どもはいないか。

指導者は、限られた時間の中で「心の安全地帯」となっているか。目を合わせ、笑いかけることで、「見ているよ」「大丈夫だよ」という安心感を子どもに与えているか。

指導者の不適切なオコナイ(3)

□ 特定の子どもを放置する

一生懸命、指導者にアピールしてきているのに、その子を見捨てていないか。

子どもの「積極性や努力を正しく評価されていない」という気持ちは、心を焦らせ、指導者への不信感へ繋がる。練習の流れに合わないからといって、見捨ててはイケナイ。

指導者の不適切なオコナイ(4)

□ 活動に参加させない、一方的に練習から排除する

「上手くできないなら見ていなさい」と伝えるのは「指導の放棄」や「排除」を意味する。

苦手さを理解し、スモールステップでの取り組みを重要視し、自信を持って練習に参加するよう導くことが肝心である。

指導者の不適切なオコナイ(5)

□ **必要な賞賛をしない、成長を価値づけけない**

「よく頑張ったね」と努力を認め、「できたね！よくやった！」と賞賛することはとても大切である。

子どもの成長に関心を抱く一方、励ましなどの適切な指導を放棄してはイケナイ。

指導者の不適切なオコナイ(6)

□ **必要な情報の提供や共有を怠る**

指導内容を他者と共有することを拒むことも「可能性の放棄」につながる。

「自分には自分のやり方がある」は諸刃の剣。確かに、それが功を奏することもあるが、コーチングは社会的な営みである以上、「独善的」「独裁的」であってはならない。

指導者の不適切なオコナイ(7)

□ 子どもの気持ちや心理的な危機に気づけていない

「本来怠ってはいけない危険の察知ができていない」ことも大きな問題である。

危険を放置すること、例えば、熱中症が危惧される中で水分補給を怠ったり、いじめを放置することも絶対にあってはならない。

**指導者は 子どもの
「心の伴走者」になっているか**

**虐待に類似した指導は、まだ
まだ見える化されていない**

子ども理解の守備範囲を広げる

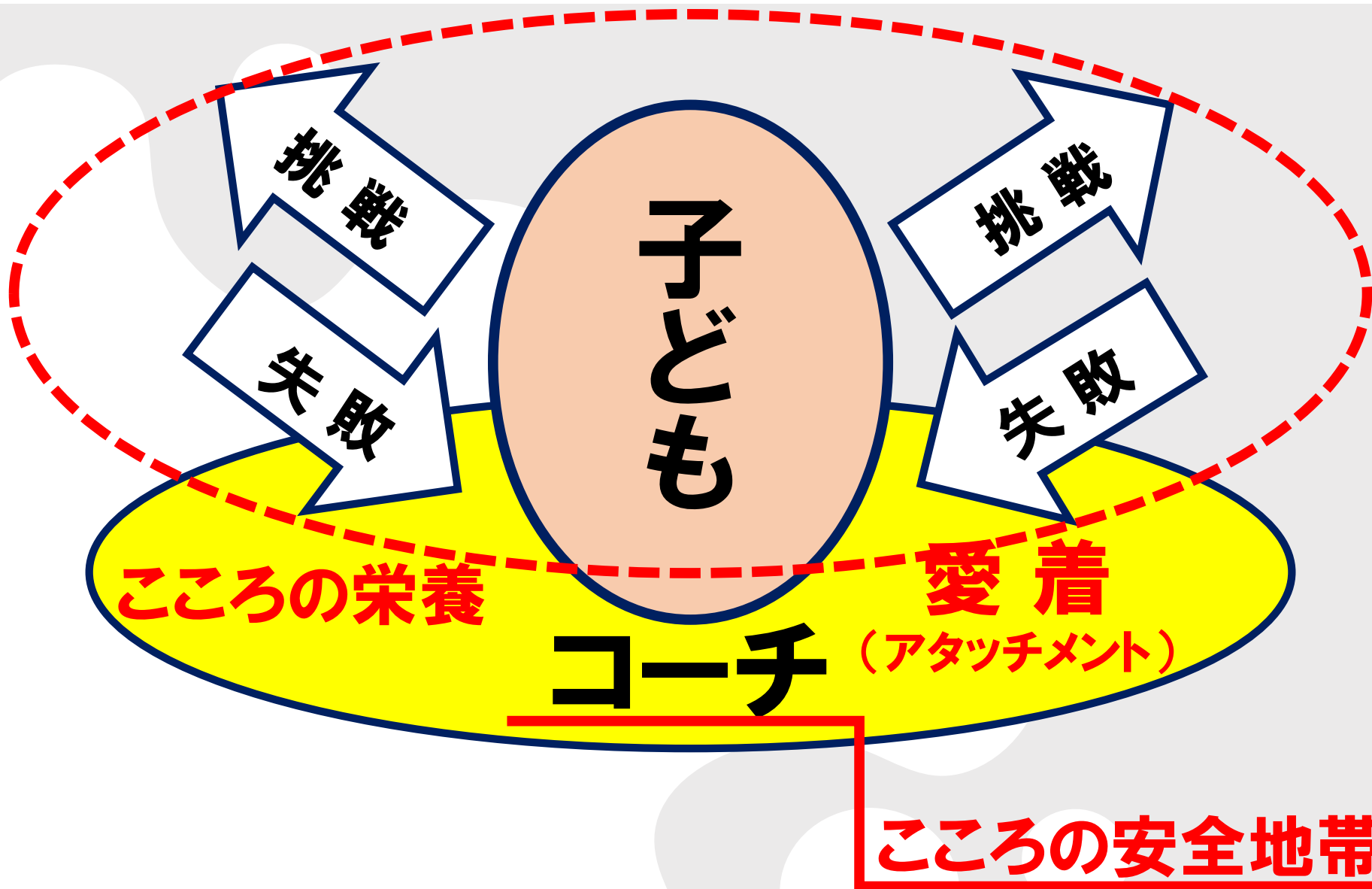
- 子どものちょっとしたミスが許せない
- 対応できないことを子どものせいにする



- 子どものちょっとした成長に気づこうとする
- 子どもの成長を何より嬉しく思う
- 子どもが対応できない時こそコーチの出番

アタッチメント コーチング

主体的な探索



ココロの栄養

愛着

(アタッチメント)

コーチ

ココロの安全地帯

アタッチメントのつくり方

- 目を合わせる
- 笑いかける
- 語りかける
- 触れ合う
- 感謝を伝える
- 努力や過程を認める

信頼関係
ラポール

自分のことを
気にかけてくれている



自分のことを
分かってくれている



安心して
挑戦することができる

子どもとの心の絆(キズナ)

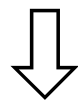
健全な『絆』を深めていく

- 子どもを指導すると同時に、子供からも学ぶという姿勢を有する(相互性)
- 『やる気』を引き出す(動機づけ)
- 押付けるのではなく、子どもと一緒に
なって価値観・文化を作り上げていく

**学ばざる者
教えるべからず**

自己を振り返り、改善し続ける！

- 見直すべきは、自分自身だと理解する
- 頭で理解できたとしても、腑に落ちない
- 例え、腑に落ちたとしても、行動できない
- 行動できても、不器用でうまくいかない



- 常に自己反省に基づき、体質改善を目指す